

あらためてよろしくお願いいたします。夏葉社の島田潤一郎と申します。

テーマが「本を読むということ」という大きなテーマですので、そんなにおもしろい話はできないかもしれません。夏葉社という出版社で年間3、4冊くらい本をつくって、それを営業して、ということをして今年で12年目になります。それまでは一読者でしかありませんでしたが、実際自分が本をつくるようになって、特にこのインターネットの時代になって、本を読むということはどういう価値があるのだろうかということを、常に問われているようなそういう気がしております。この場を借り、皆様のお時間をちょうだいして、本を読むということはどういうことなのかを、個人的なことに徹底して話していけたらと思います。それがなにかしらアドバイスになればうれしいです。

僕は1976年生まれ、現在44歳です。幼いころは、多くの子ども達と同じように、マンガばかり読んでいたんですね。小学校の図書館にあった『はだしのゲン』が最初で、それから『ドラえもん』とか、当時は『週刊少年ジャンプ』が全盛期でしたから、『ドラゴンボール』とかを夢中になって読んでいました。

読書の柱の一本がマンガだとしたら、もう一本の柱がありまして、それは『プロ野球選手名鑑』です。僕が子どもの頃は、まだ毎日テレビで巨人戦が放送されていまして、少なくない子ども達がプロ野球に夢中だったわけです。最近、当時の『プロ野球選手名鑑』を古本屋さんで買ったんですけれども、そこには選手の防御率とか打点とか、そういうものだけではなく選手の住所も載っているわけです。個人の住所が載っていて、少年たちが選手の自宅にファンレターを送ることができるようになっていました。

小学生の僕は昼の部屋に寝転んで、ずっと飽きずにその『プロ野球選手名鑑』を眺めていました。ここで重要なのは、僕はその『プロ野球選手名鑑』という小さい本を読みながら、この一冊の薄い本の中に、すべての情報が載っているというふうに信じ切っているということです。この本に書いてあることが全部で、それ以外には何もない。そんなふうに世界を単純に捉えているからこそ、聞いたことのない選手の出身地とかそういうものも全部覚えてしまうのです。

『プロ野球選手名鑑』を手にとって読んだことのない方もいると思いますけれども、それは想像してもらおうとしたら、プロ野球好きの子どもにとっては『広辞苑』のようなものでした。昔は『広辞苑』に載っていないからその言葉は正しい言葉ではない、みたいなことをよく言いましたが、それはつまり、みんながその『広辞苑』という一冊の本をとにかく信頼していたし、おそらくつくっている人もそういうものだと思って『広辞苑』をつくっていたのだと思います。一冊の本に対する信頼感というのはそもそもそういうもので、右から左に読み飛ばせばいい、読んですぐ捨てればいい、というような消費する何かではなくて、少年は、部屋にほんの数冊しかないその一冊一冊の本を信頼して生きていた。みんながみんなそうだとはいわないですけれども、多くの人々がそういうふうに本に対して信頼を持っていたからこそ、この図書館に並んでいるような豪華な全集とか辞典などを買っていたのではないかというふうに思います。そういう信頼が本の普及をある時代までは支えていたのではないかと思うわけです。

中学高校になると、みんなと同じといますか、僕らの時は赤川次郎とか西村京太郎とか山村美沙とかああいうライトなミステリーが人気を博していて、僕は何をきっかけに読み始めたのか覚えていないのですけれども、そういうものに夢中になって、図書館に通うようになりました。もっと言うと、その中に出てくる女性ヒロインに恋をしていたわけです。本って面白いなと思いながら、図書館に2週間に1回通う日々でした。それから生まれが高知県ということもあって、司馬遼太郎が好きになって。そしてなぜか柴田錬三郎が好きになって。柴錬(しばれん)の『われら梁山泊の好漢』という水滸伝のテーマにした長編小説に夢中になりました。それがとにかく面白くて、歩きながらその文庫本を読んでいた。それが自分の読書の中のピーク、といますか、あんなに夢中になって本を読んだことはあれ以来ないです。

けれど、せっかく身についた読書の習慣は、高校受験でぴったりと終わってしまったんですね。受験勉強で忙しいから、本を読む暇がなくて、結局、高校では、僕はおそらく一冊も本を読んでいないはず。何をしていたかという、中間テストとか期末テストの勉強をして、テストが終わったら、テレビゲームをしていたように思います。

当時忘れられないできごとがあって、高校の現代文の授業の時、体操部の秋本くんというちょっと小柄な男の子がいて、突然、彼が授業の途中で「先生、ぼく昨日カフカの『変身』読みました」と手を上げて言うわけです。僕は、「何だよ、急にそんなこと言い出して」と思っていました。10代の男の子なんていうものは恐ろしいもので、とにかく、ものすごい自信があるか、まったく自信がないかのどちらかで、中間というものが無いわけ。当時の僕はカフカを読んだことが無いのに、「秋本くんより俺のほうが絶対カフカのことわかっている！」と思い込んでいました。なぜそんなことを思ったかという、「島田潤一郎」という名前は、谷崎潤一郎の「潤一郎」から取ったと親から聞かされていて、だから、文学のことは僕がクラスでいちばん詳しいと信じて疑わなかったんですね。実際、『国語便覧』が好きで、暇さえあればそれを読んでいたし。

クラスで早熟な子は、安部公房の『壁』とか、国語の授業で今も取り上げていると思いますけど、中島敦の『山月記』とか夏目漱石の『こころ』とかをきっかけにして、文学を読んだりしていました。特に漱石の『こころ』は、教科書に載っているのは抜粋ですから、最後の結末が知りたいクラスメート達は新潮文庫とか角川文庫の『こころ』を一生懸命読んでいました。けれど僕は結局、高校時代は本を一冊も読みませんでした。

僕が通っていたのは日本大学櫻丘高校という世田谷にある日本大学の付属高校です。大学は父の助言もあって、社会に出て役に立つだろうということで、日本大学商学部の会計学科に入りました。1995年のことです。もともと僕は勉強ができるタイプじゃなくて、成績でいうと中学のある時点まではだいたい2と3ぐらいです。少し話が先に飛んでしましますが、大学を卒業して24歳の時に沖縄に住んでいたことがあったんですが、沖縄の当時の時給って595円で、とても安かったんです。なにかいいバイトはないかなと思って町をぶらぶら歩いたら、中学の塾の講師の募集があって、時給がたしか1200円でした。じゃあ塾の講師をとって、面接に行くと、数学の試験をやらされたんですね、中学生向けの。それなりに手

ごたえがあったんですけど、回答を全部埋めて、その結果が0点でした。それくらい数学や理系のあらゆる科目はダメでしたけれど、国語だけは昔から好きで、成績も悪くありませんでした。

僕が入学した会計学科っていうのも不思議なところで、最初は先生や先輩たちにはっぱをかけられて、みんな公認会計士を目指すんです。公認会計士がどれだけ難しいかもわかっていないで、みんな受験勉強のノリと同じように机に向かい、通常の授業のほかに毎日3時間、夜の特別講義に参加しました。僕もそれに欠かさず出て、毎日簿記の問題を解いていました。それだけ猛勉強すると、1年生の7月には簿記2級を取ることができたんですが、公認会計士になるためには、その猛勉強を365日ずっと続けなければいけないわけです。365日ずっと続けて、大学4年生で公認会計士になれるのは、たしか日本大学だと0.5人、つまり2年に1人くらいしかいないわけです。ちょっとさすがにしんどいなと思いました。1年生の夏休みもずっと机に向かって、毎日5~6時間電卓を叩いていましたが、そうすると、ちょっとノイローゼみたいになって、もうこんな勉強はしたくない、それどころか大学もやめたいというぐらいに思って、「お母さん、僕、もう大学くだらないから、出家したいんだ」と言い始めました。当時はそれなりに真剣だったんです。自分の人生をもっと意味のあるものに使いたいと思っていましたから。そして、その思いはそんなに間違っていないと思うんです。

結局、親から「じゃあ出家しなさい」というふうに言われるわけもないので、大学に残りました。1年生の夏まで一生懸命簿記の勉強はしましたから、その後は結構スムーズに単位は取れるんですよ。それで卒業までの時間が3年半ばかり開いて、何を勉強しようか、やるのであれば、一番素晴らしいものを勉強したい、というふうに考えて、最初のころは、何をやっていいのかわからないから、やたら美術館に行って絵を見ていました。ルノアールとかセザンヌとか、ああいうものを勉強だと思って、せっせと見るわけです。でも、毎日美術館に行くわけにはいきませんから、大学の図書館に行って、夜遅くまで大判の画集なんかを眺めていました。当時はアルバイトもしていませんでしたから、時間はたっぷりあったんです。そしてようやく、重い腰をあげるような感じで、文学をやってみようと思ったわけです。物心ついたときからずっと興味があって、高校の時、「俺はいちばんわかっている」ぐらいに思っていた文学にやっと取り組んでみよう。

それから自分で近所の本屋さんに行って本を少しずつ買うようになりました。ですから、僕がたくさんの読書家たちと違うのは、ずっと読書の習慣があったわけではなく、文学が面白くて文学にのめりこんだっていうわけでもなくて、自分で決めて、さあ読んでみようとはじめたところなんです。

最初に読み始めたのは、たしか堀辰雄の短編集。新潮文庫のものです。2~30ページの短編だったんですが、文学の読み方がわからないから、最初の2~3ページ読んで「う~ん」とうなり、またその2~3ページを読み返すわけです。文章はとてもきれいだけど、どういうわけかまったく読み進められない。読み方がわからないんですね。結局1年たってもその30ページの短編を読み終えることができませんでした。

次に、文学が好きな友達ができたらいいなと思って、サークルの文芸研究会に入って。一つ上の先輩に、「何か面白い本を教えてください」とお願いしました。文学を全然読んだことがない、なんてことは言えないですから、うまく言い繕って、「何か面白い本」と切り出したんですが、先輩の口から出たのは埴谷雄高（はにや ゆたか）の『死霊』という本でした。じゃあとりあえず読んでみようと思って、大学の図書館が所蔵していたその本を読み始めたんですが、あまりに難解で、信じられないですけど、その場で気を失ってしまったんです。気づいたら、図書館の床で倒れていました。

大きな転換期は大学2年生の時です。「文章表現」という授業がありまして、今もお付き合いがある文学の佐藤健一先生という先生がいらっしゃって、僕を非常にかわいがってくださいました。文章表現っていう授業は、10人にも満たない学生数で、みんな好きに文章を書いて、授業にもっていいんです。先生は毎回、若い僕たちに、「小説をどんどん書いてください」というふうにおっしゃいました。「小説を書けば、そうすればわかることがある」というふうに先生はおっしゃるわけです。

では、小説を書いてわかることは何か。小説を書いたことのない僕たちはまずとにかくまず最初のシーン、自分の書きたいもの、書きたい人物から書き始めるわけです。最初のシーンを書いたら、次のシーンを書く、それからまた次のシーンを書く、というふうに、物語を続けていくわけです。先生の教えの肝というのは、小説を書き始めたら絶対にそれを最後まで書くということでした。どんな形でもいいから最後の一字まで書く。そうすれば、小説をとおして自分が何を書きたかったかがわかる。それはつまり小説をとおして物事を考え、物事を把握していくということなんです。

自分がいま何を考え、読者にいま何を伝えたいと思っているか。そういうことをはっきりと意識しながら、人は小説を書くのではない。ある自分の思想なりを伝えたくて小説を書くというのは下策であって、そうではなくて、とにかく小説を書きたいと思って書いて、書き終わって、初めてそれで作者に理解できることがある。そういうものが小説、もっと言えば文学ではないかということ先生はおっしゃっていました。

これは言い方を変えれば、物語的に何かを理解するということなんだと思います。物語的に理解するということの対義語は、おそらく科学的に理解するということなんだと思うんですけども、人は人生の節目節目に何かに出あうと、おそらく科学的にその何かを理解するのではないと思います。そうではなくて、物語的にその出来事を理解しようとする。わかりやすい例をあげると、ひとつは恋愛であって、例えば僕がある日突然、彼女に振られるとしますよね。彼女に振られて、彼女は僕の元から立ち去る。それっきり彼女と連絡は取れないというのでは、物語というのはいつまでも終わらないわけです。なぜ振られたかわからない限り、もやもやはずっと心に残ります。けれど、その後彼女と再会したり、彼女の友達から「なぜ彼女が僕の元を去ったか」ということを教えられたりすると、そのもやもやは解消します。ああこういう理由で、彼女は僕の元から去ったんだ、と。そのときやっとはじめて、自分を客観的に見ることができずし、彼女の立ち位置や言い分もわかる。そういうふうに、ドラマを理解するように、人は自分の身の回りに起こったことを理解する。どんな不条理なことがあっても、親しい人が死んでしまったとしても、そこに無理やり意味を与えて、物語的に理解する。それが正しいとか、正しくないとかは問題ではないんです。自分の腑に落ちることがそこでは重要なのであって、そうでないと、いつまでも過去の世界にとらわれて、前に進むことができない。

では、例えば彼女に振られた話を小説で書くとすると、物語のスタート地点というのは普通に考えれば彼女と僕が出会ったところになりますよね。でも、去った理由いかんによって物語っていうものはずいぶん変わってくるわけです。彼女が僕の元を去った理由が、例えば憧れがあった幼馴染の元に行ったとするのであれば、彼女と幼馴染との出会いが物語の最初になるかもしれません。そうすると物語は少し大きくなりますよね。その理由が彼女の家族のことであって、それが非常にデリケートで複雑なことだとすると、例えば小説家は江戸時代とか何代も続く物語として彼女と僕の物語を書くかもしれない。いずれにせよ、そういうふうには人は自分に起こったこととか、自分と他者に起こったことを理解するのであって、小説を書くということはそういうことだし、小説を読むっていうのはそういう雛形、世の中にはいろんなことがある、ということを理解するものなのではないかということ先生は教えてくださったように思います。

余談ですけど、有名なミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』という小説があります。非常に面白い小説なんですけれども、存在の耐えられない軽さっていうのは、自分の人生は死によってようやく終わるわけですね。自分の物語、自分の人生物語というものは死によってようやく終わる。本当であれば、そこではじめて「人生とは何か？」が理解できるはずなんだけれども、自分は死んでしまっているから自分の人生の総体ってものは結局のところ理解できない、ということを書いている。だからこそ、その自分の存在を耐えられない軽さだと書いているわけです。僕は、何ということ言うんだろう！と若い時に驚きました。

話を戻しますけれども、先生は僕の知らない作家の名前をいろいろ教えてもらいました。最初は、村上春樹の名前も知らなかったから、村上春樹の小説を先生はすすめてくれて。あとは田中小実昌とか、ヴァレリーとか学生同士ではなかなか知ることのできないような作家の名前もいろいろ教えてもらって、少しずつ読んでいきました。僕はマラソンをやったことがないのでわからないんですけど、おそらく本を読むっていうのはマラソンに近い行為だと思うんです。最初はちょっとしか、300m、500mくらいしか走れない。でも毎日やっていると、500mが600mになり、というふうに本を読む体力のようなものがついてくるわけです。なぜマラソンと同じように思うのかというと、例えば一週間本を読むのを休むと、やっぱり体力が落ちるんですね、毎日読んでいるからこそ、どんどん長いものも読めるようになる。そういうふうにして、少しずつ少しずつ本を読むようになって、小説を読む喜びみたいなものも感じて、結局大学3年間は本を読んで、小説を書いてということはずっと繰り返していました。

大学4年間で読めた本のトータル冊数でいうと全部で20冊くらいとか、そんなもんだと思います。自分なりに一生懸命やったはずなんだけど、それしか読めなかったんですね。就職活動がうまくいかなかったっていうこともありますけれども、それよりせつかく本を読む体力がついたから、ぼくは社会に出るのはちょっとやめて、あと4年間くらい本を読もうと思ったんですね。そのことを親に相談して、なんとか許諾をもらい、それで結局27歳まで小説を書いたり、本を読んだりして暮らしていました

この4年間の生活が自分をつくったとって間違いないように思います。なぜそんなふうなことを思うかというと、最近読んで特に感銘を受けた

本に、『子どものための精神医学』という滝川一廣さんの本があります。これは素晴らしい本で、この本を読んであらためてわかったことがたくさんあります。この中にこんなフレーズがあって、それが特に印象に残っているので読みます。ちょっと難しい言葉も入ってくるのでゆっくり読みますね。

「私たちの周りには、無数の視覚的聴覚的な感覚刺激があふれている。生物的にみれば感覚受容器は、それらを全て生理的にキャッチしているはずである。認識の発達とは、それらの中から社会的に意味を構成するものだけを図として切り取れるようになること。窓の外に目をやれば無数の視覚刺激の洪水ではなく、ただちに家や木や道からなる街並みが見えるようになることである。様々な視覚刺激が飛び交っていても、会話の相手の言葉だけが図となって耳に入るようになることである。これに対して、発達の認識が遅れて感覚したままに外界を認知的にとらえる度合いが高いほど、その体験世界は様々な感覚刺激に直にさらされ、入り乱れる刺激に混乱させられやすい世界となる。それが感覚刺激への過敏さとして現れるのである。豊かな感覚性をもたらす能力は同時に感覚の混乱性をもたらす。」

耳で聞く分にはわかりにくい文章かと思いますが、これはつまり何を言っているかという、我々大人は何かを見聞きしている時はそれを動物のように感覚的にとらえているのではなくて、まず最初に意味として抜き出すわけですね。景色を見ていると同時にその意味を見ている。誰かの話を聞いているというふうに思っているけれども、そこから音ではなくて、意味だけを抽出しているわけです。ですから、意味と感覚の比合でいうと、感覚よりも意味のほうが先に立つわけですね。

例えば、我が子が幼いとき、彼は知らない街に行くと、大声で泣き出すわけです。不安で不安で仕方ない。彼にはすべてが何なのかわからない。それが街であることもわかっているかどうかともわからない。で、泣き出す。けれども、大人は知らない街に行って、それが例えどんなに遠い外国であろうと、泣き出すようなことはない。つまり、駅を降りて、いろんな街の看板を見て、ああ吉野家だとか、ああすき家だとか、日高屋だとか、まあ安い飲食店ばかり申し訳ないですけど（笑）、そういうふうに街の全体の景色を見る前に意味を抜き出していくわけですね。けれどももちろん、その景色はぼくと皆さんではずいぶん違うはずですが、それは見えているものが一緒であっても、その中で自分のわかるもの、興味のあるものに特化して、抽出しているからです。この図書館でいえば、僕は文学全集が気になるし、でもある人は実用書が気になるかもしれないし、ある人は画集が気になるかもしれない。そういうふうに大人になるよりも前に、物心がつく頃になればすでに、感覚よりも意味が先立ってくる。つまり、景色の全てを幼い子どものように直に見るってことは大人にはできないんですね。何度も繰り返しますけれども、あらゆる行為において意味のほうが、つまり言葉のほうが感覚より先行するのが通常の大人です。

では、今話したことを、本を読むということに立ち戻って考えると、どういうことになるのか。言葉を通して本をたくさん読む、いろんな語彙を知る。それはつまり言葉でもって捉えられる範囲が広がっていくということではないかというふうに僕は思うんです。たくさん言葉を知って、たくさ

んの言葉の使い方を知ることによって、見えるものも変わってくるし、もしかしたらカメラでフォーカスするみたいにより美しいものが鮮明に見えてくるかもしれないし、その景色の中にある意味というものがより複雑にわかるようになるかもしれない。それは、目がいいとか耳がいいとかってことではなくて、言葉をたくさん知っているから見えてくるわけです。ですから、ある景色を見て、「美しい」とか「やばい」とかってそういう言葉だけで終わるのではなくて、自分の言葉で捉えなおして、その美しさを堪能する。ある人は形容詞が多用で、その中には例えば古語なんかが入ってきて、平安時代の人々のように桜を堪能することができるかもしれないし、ある人は木々の名前や花の名前をたくさん知ることによって、その美しさの多様さを理解しているのかもしれない。そうした行為は人のことを理解する上でも同じようなことだと思いますし、自分のことを相手に伝える時も同じです。

ただ、その言葉というものが繊細で、たくさん語彙が豊富であればいいってことではなくて、自分により合った言葉、自分により合った言葉の組み合わせ方をよく知っている人ってということが雄弁であると、そんなことを思うわけです。世間一般的な誰にでもすぐに通じる意味だけでしか、自分のことを語れないとしたら、自分の価値は、自分がイメージしているよりはずっと下がって見える。僕は日本大学卒業で、友達は少なく、はげている、そういうふうにしかな自分のことを語れないかもしれない。それは当人によっては苦しいことでもあって、そういう苦しさからおそらく僕は抜け出したかったように思うんです。だから、言葉を、物語を学びたかった。大学生のころに太宰の小説を読んで、ああこういうふうに自分を語るのかとか、そういうことを少しずつ少しずつ学んでいたような気がします。

僕は大学を卒業して、さっき話したように本を読んできました。よく覚えているのは、23歳の時にドストエフスキーの『罪と罰』を読んだんですね。途中で挫折するかと思ったら、結構ずっとその『罪と罰』を読んで、面白いと思いました。驚いたのは、そこには難しい言葉が全くといっていいほど出てこないわけです。簡単な言葉、誰でも使えるような言葉を駆使して、深淵なことを書くのが優れた作家の仕事なのだとこのことを強く感じました。それは自分をすごく勇気づけることでした。

27歳まで、仕事はアルバイト程度はしていましたが、ほとんどの時間家の中で本を読んでいました。両親もそういうことを不思議と許してくれました。それは個人的なことを言うと、父もそういう文化的な仕事を昔はしたかったけれども挫折したみたいで。彼はもっと文学とか映画とかそういうことに携わる仕事をしたかったみたいで、けれどもできなかったから一人息子の僕にはそういうことを自由にさせてくれたんです。

読書がどんなことを僕に教えてくれたかっていうと、それはもう本当に単純なことで、多く挙げても三つのことくらいだと思います。一つは世の中にはわからないことがある、ということの本は教えてくれました。二つ目は、世の中には様々な価値があるということの本は教えてくれたように思います。最後に、重要なのは、その二つのことについてとにかく長い時間考えることが大切なんだということの本は教えてくれたように思います。これはこうだという答えを提案するものではなくて、考え続けるきっかけを与えてくれるのが本ではないかと思うのです。特にそれはインターネット

全盛のこの時代になって、あらためて感じることが多い。何かというと、答えは？とか、エビデンスは？とかっていうふうに何事も反射神経で応えなくてはいけない世の中でも、わからないことは変わらず多々あります。それについて人よりも早く答えを出すのではなくて、自分に引き寄せて自分の言葉で考えるということが重要なのではないか、というふうに思うんです。そういうことを教えてくれたのは、僕の場合は文学であった、ということになるのではないかと思います。

今年、『未来の図書館のために』という、正確に言うと昨年年末に、前川恒雄さんの本をつくりました。これは昨年4月に亡くなった前川恒雄さんの遺稿集であって、僭越ながらこの解説を任されて、2000字くらいの解説ですけれども、それを書くために前川さんの本をまとめて読み返していました。ここにいらっしゃる方はご存知かと思いますが、前川恒雄さんは日野市立図書館の初代の館長であって、移動図書館1台から日野で図書館を立ち上げて、この中央図書館の設計も含めて、日野だけではなく、日本の図書館にとって重要な仕事をなされた方です。僕は最期の最期までお付き合いしたわけではないですけれども、『移動図書館ひまわり号』という本を復刊するにあたって何度かお会いして、その時はかなりご高齢でしたけれども、常に情熱的に図書館に対して考え続けていらっしゃった。おそらく死ぬ間際まで、図書館のことを考えていたと思うんですけれども、本を読み返して、前川さんがなぜあれほどまでに情熱的に図書館に対して実践をし、考え続けられたかということ、やっぱり図書館が発展してより市民に近い存在になれば社会がもっとよくなるはずだと信じていたからだというふうに思います。

前川さんは本の中でも繰り返し、あらゆる人間には向上心・向学心があって、美を求める心がある、ということを書いていらっしゃいます。例えば、本屋さんなり図書館なりで本を選ぶ時、人は自分のレベルにふさわしい本を選ぶということはあまりしないはずなんです。僕は日大だから、日大っぽい本を読もう、というふうには思わないですね。それよりも、難しいかもしれないけれどもドストエフスキーを読んでもみようとか、カントを読んでもみようとか丸山眞男を読んでもみようというふうに少し背伸びして本を買ったり選んだりするわけです。それは別に文学だけではなくて、インテリアの本だって料理書だって何だって同じだと思うんですね。自分の今のレベルより少しいいものを目指す。その梃子として、本があって、本のある場所があるのではないかとこのように思います。

本の世界は、学歴社会ではありませんから、みんながみんな最終目標はあの本を読破することだと思って読書の階段を昇っていくわけではありません。ある人は僕のように文学書を読むことに生きがいを感じているかもしれないけれども、僕の親しい人はたくさんの本を読むより同じ本を自分が好きな本を何回も読むことに読書の価値を感じている。ある人は読んでばらばら、その寄り道こそが読書の醍醐味だと思ってあらゆる本を途中でやめたりして、でもいろんなものに興味があって。そういう読書も同じように豊かだと思います。

そういうふうにして、本を通してみんながみんな、それぞれの言語感覚みたいなものをつくっていく。今はいない、今は亡くなった作家の本を読んだりして、その亡くなった作家に影響されながら自分の言語感覚が少しずつ変わっていく。そうすることによって見えるものも変わってきますし、聞

こえてくるものも無意識的に変わってくる。どんどんどんどん言葉の範囲が広がっていくわけです。そのことによって、直接社会が豊かになるとはさすがに言う事はできませんけれども、これだけははっきり言えるのは、本を通して人生は豊かになっていくのではないかということです。見るもの聞こえるものが変わるだけではありません。自分だけの思い出に新たな言葉が与えられ、言葉によって、つまり作家が書いた何らかの文章によって、自分のうちにある過去が瑞々しくよみがえり、忘れていたことや忘れていた人のことを思い出す。それがつまり人生が豊かになるってことではないかと思うんですね。僕はなぜそうまでして本を読むのかと聞かれて、長い間、うまく答えることができませんでした。今ははっきりと言えます。人生を満喫し、幸せになりたいからずっと本を読んでいるのではないか、と思うんです。

『移動図書館ひまわり号』もそうですし、『未来の図書館のために』においても、前川さんは何回も指摘されていますが、過去の日本の図書館は、今のような図書館では全くなかったんですね。図書館が大きく変革していったきっかけは、この日野市で起こって、それからやがて全国に伝播していきます。1960年代前半までの図書館というものは、受験する学生たちの席貸しが目立って、図書館で本を借りたりする人は極めて少なかった、そういうことを前川さんは何度も書いている。図書館は市民に本を貸し出すことによって、社会に貢献する。解説にも引用しましたが、次のような前川さんの文章を読むと僕は背筋が伸びる思いがします。なくなっていました出版ニュース社の『前川恒雄著作集』という本が全4巻出ていて、どれも面白いんですが特に3巻が面白くて、たくさん付箋を貼って読みました。前川さんは、こういうことを書いてらっしゃいます。

「いわゆる学生の勉強部屋というのは、どういう意味があるか、私はこれを、公共図書館の根本的な理念に反するサービスだと思っております。どうしてかと言いますと、つまり、受験生が図書館で勉強する、この大部分は、なるべくいい大学に入って、なるべくいい就職口を見つけて、エリート官僚になるとか、重役になるとか、そういう他人との競争のための図書館の利用、図書館というより、席の利用であります。公共の図書館の理念というものは、私はそれとは全く正反対のものだと思っています。つまり、それは、皆が助け合って、学問、あるいは芸術を万人のものにする。皆の共有のものにするということが公共図書館の根本の理念だと思えます。」

この文章を自分に引き寄せて考えると、図書館という場所は、いま日本の競争社会とは全く違う場所にあるわけですね。僕はそういう競争社会に向いていないというか、そういうものにどちらかという嫌気がさしていました。社会に出る前から。だからどちらかという学校は苦手で、ひとりになりたいなあというふうに思って図書館に来たり、本屋さんに行ったりしていました。前川さんは、図書館はそういう場所であると書いていらっしゃいます。そこで自己を立て直すという大袈裟かもしれないけれど、ここに来て本を手にとって自分のことを考えて、今日の自分より少しいい自分になりたいなあというふうに思ってずっと本と付き合いってきました。もちろんいい自分になりたいというのは、その競争社会の中でのいい自分ということではなくて、もう少しましな人間になりたいというふうに思ったということです。

この著作集でいろんなことが書かれていますけれども、その中で印象深いのは、東京都立図書館の館長をされたフランス文学者の杉捷夫（すぎ としお）先生という先生の言葉です。前川さんはこの杉捷夫先生を非常に尊敬されて、いろいろ実際的にもアドバイスを受けていたりしているのですが、その杉先生はこんなことをおっしゃっています。それもこの著作集の中に入っています。

「私の頭はおよそ論争には不向きにできている。相手と対立しようとはしないで、自分の力を上げて相手を理解することに使う。誠実にものを考える人々同士だったら、そして同じように公共の福祉に気を使っている人々同士だったら、相互理解に達するのが当たり前だ。いつも私にはそう思われる。」

だから本を読むということは、論争をするために本を読むのではなくて、やっぱり自分の力を上げて相手を理解することに使う、そういうことでもあるのではないかというふうに思うわけです。

僕も論争とか競争というものは非常に好きではない。けれども、相手を理解したいというふうに思う。その理解というものは、もちろん誤解がほとんどだとは思いますが。けれどもそういうふうに自分の力を何に使うかっていったら、相手のことを理解することに使っていけたらなというふうに思います。

僕は自分の息子が出世してほしいとかそういうことはあまり考えてはいません。そうではなくて、まだ6歳ですけども、誰かの力になってくれる、誰かを支える人になってほしいなあというふうには思うんですね。それは、たくさんの人ではなくて、1人2人の人間。クラスメイトでちょっと落ち込んでいる誰か友達がいたら、その友人に「どうしたの？」っていうふうに声をかけてあげられる人間になってほしい。社会に出ても、同じように、落ち込んでいる人に「一緒にご飯でも行こうよ」というふうにずっと言えるそういう大人になってほしい。本を読めば、そこにはいろんなことが書いてあるし、それは自分のことを理解するのに役にも立ちますけれども、誰かを理解するのに役にも立ちます。そういう意味で息子には本を読んでもほしいなあとは思いますが、読まなかったら読まなかったで、別にそれを嘆くことはありません。みんながみんな本を読んでほしいっていうふうに思うかという、まあ読んでほしいんですけども、未だにうまく言えないですね。今の世の中がうまくいっているようには思えませんし、どんどん言葉というものが軽んじられているような気がします。でもとにかく本を梃子に、本のある場所をスタート地点に何かを根気強く続けていきたいというふうに思いますし、自分が作る本が誰かの助けになればいいなというふうに思います。

本を作る時はどういうふうなことを思うかという、自分が死んでも本は残るということを考えるわけです。本はそういうものですし。いい本を、たくさんの人に読まれる本ということではなくて、さっきの子どもの話ではないですけど、1人2人でもいいですから、その本によって救われたとか、その本を友人のように思ってくれるような読者に届いたらいいなというふうに思います。

20歳の時に文学を読もうと思って、文学を勉強しようと思って25年は経ちますけれども、今も全く読書に飽きるということはありません。以上で講演を終わります。

---

《司会》

島田さん、ありがとうございました。この後、チャット機能を使って質疑応答をしたいと思っています。参加者の皆様には、チャットを打てるようにしていますので、チャットで質問を打っていただきまして、それを島田さんにお答えいただき、というふうにしたいと思います。

---

●島田さんは、コロナ禍のせいで図書館の利用者や生活者にとって、読者や出版のもつ意味が何か変わったと思われませんか。変わらないというご回答かもしれませんが、あえてお尋ねしたいと思います。

そうですね。僕、印象深いのは出版業界の人と話していて、その人は書店の方でしたが、コロナ禍によって本の売上げの傾向が変わってきたと聞きました。どういうふうに傾向が変わったかという、硬い本が売れるようになってきた。それは版元でいうとみすず書房の本なんか売れるようになったというふうに言っていました。それはおそらく、リモートワークなんかによって、読書の時間が増えたからだと思います。僕も、自宅は世田谷にあって、会社は吉祥寺にあるんですけども、コロナの感染者が増えた去年の4月に電車通勤をやめて、自転車で事務所に通うようになりました。そうすると僕の場合、おもに読書は電車の中でしたから、読書の時間が激減してしまったんです。である日、「これじゃいけない」と思って、会社のデスクで食後30分本を読むようにしたんですね。そうすると、恥ずかしながら今さら気づいたのは、電車の中で読める本と机の上で読める本というのが全然違うという事実でした。A5版の人文書なんていうのは電車の中では読む気がしませんが、事務所で30分机に向かって読もうと思うと、なんとか読める。コロナ禍になってまた若い頃のような読書習慣が戻ってきて、そういう意味では大きく変わったような気がします。僕は、この1年、そういう意味では、良かったという非常に語弊がありますけれども、本をたくさん読めるようになりました。ですから、質問の答えですが、大きく変わったような気がします。

●電子書籍が普及しつつあるような昨今、夏葉社の書籍は物体の本としても非常に思い入れがある造本になっていると思います。書店の本棚で輝いているように見えます。島田さんの狙いがあればご教授ください。

うちの本、まあ結構、布で装丁をつくったりとか、造本にお金をかけているんです。なぜそういうふうなことをしているかという、それは今回講演で話した内容と非常に関連があるんですけども、僕は若い時、特に大学生の時になかなか本を読みたいと思っても本が読めなかったんですね。それはもう単純に能力のせいで読めなくて、でもずっと本に対する強い憧れがあったわけです。本に対する強い憧れっていうものは、教養的なものだからというよりも、綺麗な文芸書とか立派な人文書とか、そういうのがやっぱり佇まいが綺麗だったからっていうのが非常に大きいんですよ。そういうものを見て、かっこいいなあと思って買うわけです。買って、自分の書棚に置いていく。置いているだけで、何か生活の中に重心が一つできるような感じになる。覚えているのは、ちょうど僕が大学生だった95年から99年は、いろんな出版社が何周年とかで、まず『ユリシーズ』の新訳が和田誠さんの装丁で出ました。あと覚えているのは、ヘーゲルの『精神現象学』がA5版で、新訳で出ました。あとプルーストの新訳も集英社から出て、そういうものはみんなどれも綺麗だったんですね。そういうものを手元に置いて、本に対して常に憧れを持って、読むか読まないかっていうより、本というものが美しかったからこそ読んでみたかった。ですから、自分のつくるものも、中身が良ければ外回りはどうでもいいというよりは、それよりも先に本っていうものは綺麗なものだ、部屋の中に置いてみたいなどと思って買ってほしいと思って、なるべく本の造本にはお金をかけて力を入れています。

●本づくりには編集・校正やDTPなどいくつかのプロセスがあるかと思いますが、出版業を営むにあたって、それらの勉強をされることはあるんでしょうか、教えてください。

僕はその、特殊でして、編集の経験全くなくして、突発的に出版社を始めているわけです。編集をどこでもやったことがなくて、ほぼ素手でというか何も無い状態から始めて、いまもそんなに状況は変わりません。なぜそういうことができるかという、それは周りにデザイナーとか校正者とかプロがいるからです。ですから、僕のやることっていうのは、本をたくさん買うことくらいです。こういうような本をつくりたいっていう見本が家の中や事務所の中にたくさんあるわけですね。

例えば、前川さんの『移動図書館ひまわり号』を読んで素晴らしかった、これが約30年絶版であった、こういうものを復刊したい、参考になるのはこの本で、というふうなことをデザイナーに相談すると、デザイナーが形にしてくれる。校正者が校正で見てくれる。そうすると、じゃあ編集者で一番重要な仕事は何かっていうと、それはよき読者であること、それに尽きるような気がします。編集者の仕事は、こんな仕掛けをしてこんなふうにして売れたとかっていうふうなことではなくて、よい読者となること。というのは作家から原稿をもらった時に一番最初の読者になるのは編集者ですから、その編集者の目が曇ってはいけないわけです。

僕はそういう意味では、未だに紙のことも全然わからないんですよ。編集の経験をしていくと、皆さんどんどん紙に詳しくなって、これはこの紙で、とかって言う。僕は未だに全くわからないんですよ。それより、こういう古本でこういう素敵な紙を見つけたと思ったら、印刷会社の人に、こ

の紙は銘柄まだありますかっていうふうに聞いて、そういうふうの本をつくっています。ですから、厚みはこの本を参考に、この紙はこの色を参考に、レイアウトはこの本を参考に、という感じです。それはもしかしたら勉強といえば勉強なのかもしれないけれども、どちらかという、自分が好きでそういうものを集めて、それを参考につくっている感じです。

●今日はありがとうございます。出版は文化だと言われますが、出版社を営む上で経済的なバランスをとらなければいけないと思います。このバランスについて、どうとらえていますか。

会社でいうと、今まで会計でいうと11期あって、赤字が3期で黒字が8期なんですね。ですから、全体を通して見ると黒字といえます。その経済的なバランスっていうことに関しては、正直いうと、ほとんど考えていないというところもあってですね。会社を始めた時からそうですけれども、自分が良い本をつくれたというふうに思えたら、まあ何とかなるのではないかとというのが、ずっと考えていることです。そして、それでまあ何とかなっているというのが11年やった結論ですね。

例えば、ある本、それは出版だけでなく、全ての仕事に関して同じかもしれませんが、自分がいいものをつくったとしますよね。これを3か月以内に売らなきゃいけないと思ったら、いろいろ仕掛けが必要となるんです。広告は打たなければいけないし、ビジネス的な戦略をいくつもつくらなければいけないけれども、自分がいいものをつくったと思って、それを3か月じゃなくて1年、5年、10年かけて売ればいいというふうに思ったら、何にもしなくてもいいとまでは言わないですけども、あとは読者を信頼して待てばいいのではないかとというふうに思うんです。

さっき、本をつくる時はデザイナー・校正者がいるから、本をつくれるというふうに言いましたけれども、本を売るのはやっぱりプロの書店員がいますから、彼らの力を頼るわけです。彼らは毎日本を見ているから、最初の1ページから最後の1ページまで読まなくても、これはいい本か悪い本かというものがわかるんですね。いい本をつくれたと思ったら、それは書店員に届くはずですし、僕がそんなに頑張って宣伝しなくても、書店員が宣伝してくれるはずなんです。重要なのは、短い間に結果を求めないということだと思うんです。長期的に見る、長いスパンでものを考えれば、物事は好転していくはずだと楽観的に考えています。あくまで商売ということに関してですが。でもこの話は、単純に僕の会社が僕ひとりだからというのが大きいんです。10人かかえていたら、こんな悠長なことは言ってもらえないし、3か月でものは売らなきゃいけないけれども、ひとりであったらそこまで経済的なことは考えなくても大丈夫です。たぶん。

●コロナ禍で硬派な本が読まれるなどの変化があり、そうした変化が競争社会ではない社会のあり方の変化を促すかも、と思われることはありますか。

すごく難しい質問です。でも、素人考えですけれども、今の社会がこのままずっと続くと、少なくとも若い人は考えてないような気がします。若い人としゃべっていると、みな立派なんです。彼らは僕らより直感的に物事を捉えるし、センスがいいし、情報の取捨選択能力みたいな、瞬発的にこれはいいのか悪いのかっていうものを捉える力は、ずっと子どもの時からインターネットを見ているからか何なのかわからないけれども、すごく優れています。ですから、これから社会は大きく変わっていくんだというふうには思うんです。そういうものの支えに本がなければいいというふうには思いますが、一方で、さっき本は長くもの考えるためにとても役に立つというふうに話しましたが、どんどんみんながみんな短期的に結果を求めているような気がしていて、それはやっぱり恐ろしいですね。今日問題にしていることは、明日解決しなければいけない、一週間以内に解決しなければいけない、というふうに性急に思っている人が増えているような気がします。ですから社会は変わっていくはずでしょうけれども、もう少し長いスパンをもってみんなが考えていけば、よりよい社会になるはずだと思いますし、そのために必要なのはやっぱりSNSではなくて本ではないかというふうに僕は思います。

もうそろそろ最後にしましょうか。

●会社を立ち上げられてから、全国の本屋さんを営業で訪問され、多くの書店員さんと話をされてきたと思いますが、特に印象に残った話をお聞かせください。

高知県に本屋さんがあって、生まれが高知なんで毎年帰省するんですけども、そこにいる僕より2~3年上の男性の書店員さんと1年に1回会うんですが、そこで僕も彼も「今年はこれを読みます」、「じゃあ僕は今年これを読みます」とかって言って。1年経ってまた会って、あれはどうでしたか、面白かったですかって報告し合います。去年だと、僕は岩波文庫の『西遊記』を読みますとか、一昨年は『チェーホフ全集』を読みますとかかって言って。1年に1回、10分~15分しか話さないんですけども、その人の存在がすごい僕にとっては大きいんですね。長い間読んで、長い間考えて。読んでそれだけインプットしたけど、アウトプットはほんの一言二言で、「面白かったです」、「やっぱりよかったです」とか、「挫折しました」とか。一人で本を読んでいる人は日本全国にたくさんではないかもしれないけど、僕の目の前にたしかにいる。このことを実感できたのはすごく生きる上で支えになりました。20代の時は、読書をしていても、しんどいな、何のためにこんなことやってんだろうっていうふうに思ったけど、自分が今こういうふうな仕事をして、いろんな人と話すことができるのは、20代の時に本を読んでいたからに他ならないのであって、その意味でいうと、20代の貯金でこの仕事をしているような気がします。40代になって、友達が一人二人増えるっていうのは、この上なく幸せなことです。すみません、変な終わり方ですけども。

●今日はすごく楽しかったです。読書をご自身の記憶にとどめておくために、読書手帳などはつけてらっしゃいますか。

これはもう、大学の中からキャンパスのノート1冊に読んだ本のタイトルを順番でだーっと書いているんですね。それはたまに読み返すと面白いんです。どういう順番で読んできたかがわかるので。頑張って読んだ本は蛍光線引いていいことにして、この年は蛍光マーカーが多いなとか、そういうことを見て楽しんでいます。ですから、読んだ冊数もわかるんですよ、トータルで。大学卒業してから、そうすると1100冊とかそれくらいですね。ですから、いわゆる読書家って言われている人に比べれば、全く読んでないですけども、毎日、1週間に1冊本を読むと、20年間で1000冊読めるんですよ。すごい単純なことですけど、今44歳だから、84歳までいけるとしたら、2000冊読めるわけだから。これは楽しみですね。

---